

Title	＜書評＞Janell Watson, Guattari' s Diagrammatic Thought : Writing Between Lacan and Deleuze
Author(s)	尾谷, 奎輔
Citation	共生学ジャーナル. 5 p.269-p.276
Issue Date	2021-03
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79064
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Janell Watson

Guattari's Diagrammatic Thought: Writing Between Lacan and Deleuze

Continuum International Publishing Group, 2009, 226 頁

尾谷奎輔*

1. はじめに

本書 *Guattari's Diagrammatic Thought* は、フェリックス・ガタリの研究者であるジャネル・ワトソンの著作である。著者のワトソンはバージニア工科大学で教鞭を執り、ガタリ研究のほか、フェミニズムやバルザック、プルーストに関する研究で業績を上げている。

本書は世界的なガタリ研究者であるギャリー・ジェノスコが背表紙に推薦文を寄せているように高く評価されている研究書である。

本書の特徴は、副題にラカンとドゥルーズの名が記されているように、ガタリがラカン、ドゥルーズから受けた影響を整理し、またその両者をタイトルに記されているダイアグラムという概念によって理論的差分を明らかにしている点である。ガタリとラカンとの間の理論的差異を比較検討した論考は少なくない。なかでも、ラカンの対象 *a* がガタリの機械概念として組み込まれたことはよく知られている⁽¹⁾。

本書の鍵概念であるダイアグラムの思考についてワトソンの解釈に則りながら簡単に説明したい。これはガタリの記号論の中核ともいえる記号過程であり、本書のタイトルも、これに由来している。ダイアグラムとは、記号的に形式化された実質に基礎づけられているシニフィアンの記号とは異なる非シニフィアンの記号過程であり、意味作用を介さず、表象の外部の領野で作動するような思考を発生させる。例えば、音楽、芸術などがダイアグラムの思考を発生させるものとして挙げられる。

ここで着目すべき点は、ワトソンがラカンの「一なる徴 (*trait unaire*)」、ガタリの「記号一点」について整理し、これらが機械概念そのものを規定するものとして析出し、「一なる徴」、「記号一点」を巡る議論展開の内実を検

* 大阪大学 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程 (ak.kotani78@gmail.com)

討していることである。さらに、「記号一点」がダイアグラムの思考へと概念形成される過程をワトソンは見定める。本書の第一章の読解によって、その地点から機械や構造、横断性といったガタリ概念群を我々は把握することができる。

2. 全体の概要

本書は四部構成である。第一章では、ガタリとラカンの精神分析を対比させながら理論的差分を明らかにし、ガタリ独自の理論形成の過程を整理している。第二章では主に『機械状無意識』を扱いながら記号と主体性について論じている。この章ではダイアグラムの記号論の内実が語られる。第三章では、『分裂分析的地図作成法』、『カオスモーズ』の記号と物質の新たな連繫、記号論的エネルギーについて論じており、プリゴジンやステンゲルスらを参照項にしながら、美的、倫理のメタモデリングの理論について論及している。第四章ではその応用として歴史と政治について語られ、特にレーニンの切断による革命について論及される。

本書の第一章では、機械概念、ガタリ独自の記号論の内実がラカンとドゥルーズを参照しながら整理されている。曖昧で漠然とした共通理解しか得られていないガタリの機械概念について、評者はここで改めてワトソンの解釈に従い、明確に整理する必要があると考えた。ワトソンはガタリ対ラカンという対立図式を提示するのではなく、「一なる徴」、「記号一点」という概念を明らかにしながら機械、横断性概念の内実を明らかにする。

3. 個室と制度

以下、ワトソンのガタリ読解を整理したいと思う。ワトソンはガタリの機械概念とそれに基づく機械状の記号論の形成過程をラカン、ドゥルーズとの入り組んだ影響を考察しながら手際よく整理している。ガタリはラカンのセミナールを長年聴講し、機械概念の祖型を取り出し、独自の記号論を展開した。ドゥルーズとの協働以降、ガタリはラカンに対する批判意識を強めていくが、その記号論のひとつの着想源はラカンに求められる。

ガタリはラカンから精神分析を学び、マルクス主義者でもあった精神分析家のジャン・ウリらとラボルト病院で制度論的精神療法を実践する。制度論的精神療法はフロイトやラカンの精神分析と異なり、一対一のカウンセリングではなく、社会集団との連関のなかで治療実践される。ガタリは従来の精神分析が社会的、政治的領域を無視していると指摘していた。精神分析の転移の技法を閉じた個室のなかではなく、開かれた集団的実践のなかで展開する。

やや大雑把な説明になるが、転移とは分析者と分析主体（被分析者）との関係の感情の結びつきのことである。精神分析は転移の問題（逆に分析者が患者に特別な感情を持ってしまう逆転移も含めて）と切り離すことができない。転移は精神分析の実践に常に現れるものであり、むしろその転移を原動力にして扱う技法として精神分析は確立された。

転移は通常、人間関係のあいだで発生するものだが、ガタリは転移の技法を人間関係だけではなく、動植物や人工物など人間以外の事物へ拡張していた。従来の精神分析では、家族を基盤としたひとつの集団のなかで人間の無意識が位置づけられるが、ガタリ的な無意識は人間、その他の動物、物理的要素、技術的要素など人間以外の集団性によって形成され、そのような諸連関によって成り立っている。ガタリは人間以外の存在である遺伝子や昆虫、数学や粒子といった要素を横断するダイアグラムの思考を提示する。

ワトソンはラカンの治療セッションでは分析者と分析主体（被分析者）との一対一での分析が主であり、そのなかで転移の技法というものが扱われると考察している。ガタリの場合、転移は、一対一の関係だけに見出されるものではなく、あらゆる諸領域を架橋とする記号の連環のなかでの横断的なプロセスに見出されるものとなる。「制度」概念は通常用いられる社会的契約関係に基づくような通常用いられる固定的な制度ではなく、家族や学校、あるいは身近な場として提示される。

これがラカンの転移の技法から集団的実践へと移行するものである。ガタリは転移の関係が閉じられた関係のなかで、固定化されてしまうことを阻止しようとする。制度分析の目的は横断性の度合いを増加させることであり、横断性こそ患者の主体性が生産される場を提供するものとなる。

ワトソンはガタリの「記号から記号へ」と「機械と構造」という二つの論文を取り上げながらラカンの論考「盗まれた手紙」からの影響関係を考察し

ている。ガタリが構造主義を乗り越える機械状の記号論を提示していったことは広く知られているが、しかし、「記号から記号へ」の「記号一点」とそこから導出される機械論が、ラカンの言語論に触発されながらも、それとは異なる方向のダイアグラムの記号論の出発点であったことは共有されているように思えない。60年代後半のガタリ、ラカン、ドゥルーズの三者の複雑な理論的交流、その後のドゥルーズとガタリとラカンの精神分析批判の転回点をワトソンは的確に整理しているように思える。

60年代後半のラカンとドゥルーズとの理論的交流のなかで導き出された機械概念とダイアグラムの記号論は、本書の議論展開の骨子となっていると同時に、その三者の関係性について関心があるものにとって意義のある論考となっている。

4. 「一なる徴」と「記号一点」について

ガタリは、1966年に「記号から記号」という論考をジャン＝ピール・ファイユの仲介によって雑誌『ルシエルシュ』にて発表している。これはラカンのセミナールに参加していたガタリが独自に記号論を練り上げた論考を、1961年にラカンに手紙で送ったものを元としている。1954年から55年のセミナールでラカンは、『快感原則の彼岸』を参照しながら、フロイトが既に機械としての有機体を捉えていたと言及した。母親が子供の前に現れたり、消えたりするような、あるいはフォルト・ダー（日本の「いないいないばあ」のようなもの）という乳児の遊びでは現前〈+〉と不在〈-〉の運動がセリーを形成し、この二項の系列が象徴的なシステムを作動させ、機械的な反復と記憶の原理を形成しているとラカンは考えた。機械は1と0の二項の系列の電子回路によって駆動する。シニフィアンは反復の原理を必要としている。

そしてここから機械と人間は動作を記憶し、反復するという。また記憶と反復は思考していない状態であるとフロイトは説明し、さらにラカンは、機械は思考しないと付け加えて説明する。ラカンはこの機械的原理によって産出される意味作用が対人関係を規定するものと考えた。主体、自我、大文字の他者、他者との想像的、象徴的な関係を示すシェーマ Lはこの原理に

よって基礎づけられているという。

ガタリはラカンの 1960 から 61 年のセミナーで取り上げられたフロイトの *einen einzigen Zug* をラカンが再定義した「一なる徴 (*trait unaire*)」に着目する。この「一なる徴」はシニフィアンの起源であり、それ自体はまだシニフィアン以前のものである。この「一なる徴」が象徴界に参入する象徴的同一性を可能にする端緒となる。

ワトソンによれば、ガタリはこの「一なる徴」を「部分的シニフィアン」として捉え、それを存在論的な領野に位置付けようとしたという。これこそがガタリとラカンとのひとつの理論的差分であるのだ。そしてガタリは「一なる徴」よりもさらに原初的な状態を探っていた。この「徴 (*trait*)」は記号の諸連関が成立する以前の原初的な形態であり、いまだシニフィアンとして成り立っていない記号の生の素材であるという。「記号一点」というそれ自体もはや分割不可能な「記号の生の素材」を「一なる徴」よりも原初的なものと措定し、存在論的機能を作動させるダイアグラムの記号論を展開する。それ自体素材でしかない「記号一点」は二つ一組で連繫することで「一なる徴」を産出する。さらにこの「記号一点」が三つ組みになると、機械の記憶と反復を作動させる〈+〉と〈-〉のような二項のバリエーションを作り出すことが可能となる。機械のシステムが機能するためには、二項に加えてそれらに隣接する空虚が必要であるとワトソンはガタリの記号論を整理する。ガタリはこのバイナリーなコードを発音、詩、演奏記号といった様々な記号の連鎖に見出せるという。ガタリはラカンのシェーマ L とは異なる人間主体に限定されない水準のダイアグラムの記号論を練り上げたのであった。

5. 構造と機械

ドゥルーズはガタリと出会う以前、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』、『差異と反復』、『意味の論理学』でラカン、フロイトらの精神分析への強い関心を示していたことはよく知られている。ワトソンによれば、ガタリはドゥルーズの『意味の論理学』のなかにも「機械」概念を発見していた。1969 年に提出されたガタリの論考「機械と構造」では、ドゥルーズが提示した構造の条件

に同意している。ドゥルーズはラカンのシニフィアン連鎖にセリー形式を適用しながら独自に解釈している。ドゥルーズにとって、構造とはシニフィアンとシニフィエとのあいだの齟齬によって成立する。二つの異質なバイナリーなセリーは、パラドックス的な要素に向かって収斂する。このパラドックス的な要素は、二つのセリーを「差異化するもの」であり、機械的なものとして捉えられていたものである。ドゥルーズはこのガタリの機械概念に関心を示し、精神分析から距離をとるようになる。そして、ドゥルーズとガタリは『アンチ・オイディプス』を著し、ラカンと対立することになる。

6. 非人間と記号

ワトソンの指摘によれば、フロイトとは異なり、精神分析の圏域を生物学、動物行動学、神経学、物理学的水準まで拡張しなかったラカンに対し、ガタリはそのような各領域と連環する記号論を展開する。ラカンにとって無意識は言語によって構造化されているが、一方でガタリの無意識はシニフィアンによって還元不可能な対人関係の外部の各領域を横断する記号過程によって成り立っている。ガタリはフロイトの精神分析は要素還元主義的だと言及し、距離をとる一方で、フロイトの生物学主義に回帰している。ラカンはそのようなフロイトの見解とは距離をとるかわりに、レヴィ＝ストロース、ソシュール、ヤコブソンらの構造主義的言語観を採用し、無意識は言語的構造に規定されるという立場をとる。その一方でガタリは『分子革命』以降、ジャコブ、パース、イエラムスレウらの言語論、記号論と結びつけるようになる。

彼らはそれぞれ、新しい研究領域に触発されつつ、記号学、あるいは記号論を打ち立てていたが、彼らの記号観、言語観には差異があるとワトソンは指摘した。

第二章でワトソンが整理するように、ラカンは動物の性交は想像界に属するものであるのであって、生物学には還元されない原理であるとした。生物学的な規定を超えて、動物も人間と同様に想像界を介して性行為することになる。人間の性は想像界から必然的に象徴界へと移行すると考え、言語的な象徴界のシステムなしには、性的関係には至らないという。つ

まりラカンが記号と人間の言語を区別していた。ガタリはラカンと同じく、動物が使用する記号は人間が使用する言語とは異質なものと認めるが、人間であれ人間以外のものであれ、非言語的で象徴的なものを重視する（ガタリの言う象徴（symbolic）的なものとラカンの象徴界は位相の異なるものと理解しなければならない）。

7. おわりに

ダイアグラムのプロセスは、横断性を作動させるものであり、ガタリの治療実践である制度分析を機能させるのであった。現代思想のひとつの分水嶺である、ラカン派の精神分析と（ドゥルーズと）ガタリの理論的差異をワトソンは明らかにした。再度強調したいのは、ガタリの尻馬に乗ってラカン派の精神分析を批判するのではなく、転移の技法の別の局面をワトソンの研究書から我々は学ぶことができることにある。特にガタリとラカンとの記号論、言語観の理論的差分を明らかにしたことで、ガタリの諸概念の理解を深めることができるだろう。

注

- (1) 千葉雅也 2013『動きすぎてはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社、佐藤嘉幸、廣瀬純 2017『三つの革命——ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』、講談社選書メチエ、Genosko, Gary. 2002. Felix Guattari: An Aberrant Introduction (Transversals: New Directions in Philosophy) , The Athlone Press,などが挙げられる。

参考文献

- Jacques, Lacan. 1966. *Écrits*, Paris: Seuil.
- Jacques, Lacan. 1978. *Les écrits techniques de Freud*, Paris: Seuil. / 『フロイトの技法論（上・下）』小出浩之、笠原嘉、小川豊昭、小川周二共訳、東京：岩波書店、1991年
- Jacques, Lacan. 1975. *Le Moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*.

Texte établi par Jacques-Alain Miller. Paris: Seuil.／『フロイト理論と精神分析技法における自我（上・下）』 小出浩之、鈴木國文、南淳二、小川豊昭共訳、東京：岩波書店、1998 年

Félix,Guattari. 1974.*Psychanalyse et transversalité. Essais d'analyse institutionnelle*, Paris:La découverte.／『精神分析と横断性』、杉村昌昭・毬藻充訳、東京：法政大学出版局、1994 年

Genosko, Gary. 2002. *Felix Guattari: An Aberrant Introduction*(Transversals: New Directions in Philosophy) , London: The Athlone Press

千葉雅也 2013『動きすぎてはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』、東京：河出書房新社、

佐藤嘉幸、廣瀬純 2017『三つの革命——ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』、東京：講談社選書メチエ